

50年を造る、 100年を創る。

1938年に自分たちの技術で社会に貢献する精神のもと、
ボイラを製造する会社からスタートしたタクマ。
環境への負担が少ないごみ焼却施設やバイオマス発電所、
地域の拠り所にもなるクリーンセンターなど、
50年以上必要とされるものを造り、お客様や地域の日々を支えています。

これからの私たちに求められていること。
それは、50年を造る技術やサービスを発展させ、
環境・エネルギーのリーディングカンパニーとして、
従来の枠にとらわれず、気候変動への対応や循環経済など、
100年先を見据えたサステナブルな社会を創っていくこと。

50年を造る、そして、100年を創る。

これはタクマの企業価値であり、私たちのミッションです。
創業時から変わらない想いを胸に、
未来に向けて必要とされるものを生み出し、
お客様や社会に必要とされる企業であり続けます。

社是

技術を大切に
人を大切に
地球を大切に



INDEX

50年を造る、100年を創る。

社是・経営理念	03
TOP MESSAGE	05
At a Glance	09
TAKUMAの技術	11
TAKUMAの貢献	13
TAKUMAの軌跡	15
TAKUMA'S WORK	17

Section 01 成長戦略

タクマグループの価値観とビジョン	21
価値創造プロセス	23
重要課題（マテリアリティ）	25
第13次中期経営計画	27
事業戦略	31
納入実績	39
特集 町田市バイオエネルギーセンター	41

経営理念

世の中が必要とするもの、世の中に価値があると認められるものを生み出すことで、
社会に貢献し、企業としての価値を高め、
長期的な発展と、すべてのステークホルダーの満足をめざす。

田熊汽罐創業の精神である《汽罐報国》※を今日の言葉に置き換えますと、自らが生み出す財・サービスによって世の中に貢献するということになります。これは現在企業経営の重要課題となっておりますCSR（企業の社会的責任）にも通じる理念ともいえます。タクマならびにタクマグループの経営理念は、この創業の精神にあります。

※汽罐報国：当社の創業者であり、明治・大正期の日本十大発明家でもあった田熊常吉が掲げた当社（当時は田熊汽罐製造株式会社）の社是で、「汽罐=ボイラ」の製造・販売・サービス等の企業活動を通して「報国」すなわち社会に貢献することを意味します。

タクマグループ 会社倫理憲章

当社およびタクマグループ会社が企業活動を行っていく上で、すべての役員および社員が、当社およびグループ会社を取り巻く環境と社会的責任を自覚し、関係法令やルールを遵守し社会倫理に即した行動をとることが、当社およびグループ会社の健全な発展に不可欠です。この認識のもと、経営理念の実現をめざす行動規範として本倫理憲章を定め実践します。

1. 「良き企業市民」として、地球環境との共存を図るとともに、積極的な社会貢献に努めます。
2. 法令を遵守し、公正、透明、自由な競争を心がけ、適法な事業活動を行うとともに、健全な商慣習に則り、誠実に行動します。
3. 市民社会の秩序や安全に脅威を与える反社会的勢力および団体とは、一切関係を持ちません。
4. 基本的人権を尊重し、差別行為はいたしません。
5. 優れた技術に基づいた高品質な製品、サービスの提供に努め、お客様から高い評価と信頼を獲得します。
6. インベスター・リレーションズ(IR)その他の活動を通じて、株主・投資家への適時かつ公平な企業情報の開示に努めます。
7. 会社の財産・情報の保護に努め、業務以外の不正または不当な目的に使用するような行為はしません。

編集方針

CSR報告書2022は、財務情報とESG（環境・社会・企業統治）への取り組みなどの非財務情報を統合的に整理し、当社グループの、社会と会社の持続的な成長への取り組みをステークホルダーの皆さまにわかりやすくお伝えすることを目的として発行しています。特に今回のCSR報告書では、新たに策定した企業コンセプトの掲載や、企業統治に関する情報を拡充することにより、一層理解いただけるよう工夫しました。本報告書をコミュニケーションツールとして活用することで、ステークホルダーの皆さまとの対話を深め、さらなるCSR活動の改善、企業価値の向上を実践していきます。

発行者：株式会社タクマ コンプライアンス・CSR推進本部 CSR部
対象期間：原則として2021年4月1日から2022年3月31日までです。一部2022年度の活動内容も含んでいます。
対象範囲：原則として株式会社タクマおよび関係会社を対象としています。発行時期：2022年7月

TOP MESSAGE

価値あるものを生み出し、
社会課題の解決や
世の中の持続的発展に
貢献しつづける。

2022年7月
株式会社タクマ 代表取締役社長

南條博昭



■ 経営理念

明治大正期の十大発明家でもあった田熊常吉は、1938年にボイラを通じて社会へ貢献するという「汽罐報国」の精神を掲げ当社を創業しました。以来、タクマグループは、この精神を継承し、あらゆる種類のボイラを手がけるとともに、ボイラで培った技術を生かして廃棄物処理プラントや水処理プラントなどの環境衛生分野へ進出し、エネルギーの活用と環境保全の分野を中心に事業を広げ、社会の発展と課題解決に貢献してきました。 **P15-16**

当社の経営理念「世の中が必要とするもの、世の中に価値があると認められるものを生み出すことで、社会に貢献し、企業としての価値を高め、長期的な発展と、すべてのステークホルダーの満足をめざす。」はこの創業の精神にあり、事業活動を通じて社会の長期的、持続的な発展に貢献することが、当社グループの原点であり、変わらぬ価値観です。

この価値観の下、製品・サービスの改良・改善を積み重ねて蓄積してきた技術・ノウハウと、アフターサービスやソリューションの提供等による長年にわたる真摯なお付き合いを通じて培われたお客様との信頼関係が、有形無形の財産として脈々と引き継がれ、当社グループの強みとなり、競争力の源泉となっています。

■ 持続的な成長に向けて

現在、私たちはさまざまな社会課題に直面しています。中長期のトレンドにおいては、グローバルな課題として、気候変動問題の深刻化、人口の増加・新興国の経済成長にともなうエネルギー需要の増加等があり、一方国内では人口減少・高齢化による内需の縮小、人材・担い手不足や国・地方自治体の財政の逼迫、公共インフラの老朽化などがあげられます。さらに、新型コロナウイルス感染症の影響やロシア

によるウクライナ侵攻は、持続可能な社会の実現について不確実性を高めました。このような状況においても、将来に向けて持続的な成長をいかに実現していくかが重要な課題です。当社グループは、中長期の経営方針として長期ビジョン「Vision 2030」を策定し、その実現に向けたファーストステップとして、2021年4月より「タクマグループ第13次中期経営計画(2021～2023年度)」をスタートさせました。人材やエンジニアリング力などの経営基盤を強化することにより従来のビジネスの一層の強化を図ると同時に、将来の環境変化への対応を加速させて、持続的な成長をめざします。 **P27-30**

同中計の初年度となる2021年度においては、経常利益106億円と期首の目標を若干下回ったものの、一般廃棄物処理プラントやバイオマス発電プラントなど引き続き堅調な需要を着実に受注に結び付け、受注高は期首の目標を上

回るとともに過去最高を達成しました。引き続き、中計の実現に向けて邁進いたします。

■ ESG経営の推進

当社グループは事業活動を通じたESG課題への取り組みを強化し、すべてのステークホルダーの満足とグループの持続的な成長をめざすESG経営を推進します。 **P23-26**

—ENVIRONMENT(環境)—

当社グループの2030年にありたい姿を示した長期ビジョン「Vision 2030」において、「ESG経営の推進によりお客様や社会とともに持続的に成長し、再生可能エネルギーの活用と環境保全の分野を中心にリーディングカンパニーとして社会に必須の存在であり続ける。」ことを掲げています。再生可能エネルギーの導入拡大による環境負荷の軽減は、気候変動対策上不可欠です。特にバイオマスや未活用の



廃棄物を燃料とする発電は、天候に影響を受けず安定的に電力供給をすることができるうえに、廃棄物の再利用や減少につながるため、循環型社会の構築にも大きく寄与します。当社が提供するバイオマス発電プラントと一般廃棄物処理プラントにより、バイオマス・廃棄物をエネルギーに変換することで、二酸化炭素等の温室効果ガスの排出量削減と電力の長期安定供給の両面で貢献していきます。

—SOCIAL (社会)—

当社の持続的成長には、各部署、現場を支える人材の活躍が必須です。ダイバーシティを推進し多様な人材を活用することで、事業環境の変化に柔軟かつ迅速に対応することが可能になります。さらに、表層的なものに深層的なものが加わることで、多様な視点が組織に新しい考えや思考をもたらします。多様性をお互いに認識し、尊重することにより、組織が多様な人材を受け入れ、その能力を発揮して、適材適所で活躍できる環境を整備します。一人ひとりが当事者になり、仲間としてしっかり向き合い、本音で目的を共有し、徹底した議論を通じて決まったことを全員が実行する職場をつくり、成長と競争力の強化につなげます。

—GOVERNANCE (企業統治)—

当社グループを取り巻く事業環境は、先行き不透明な状況が続くと予想される中で、一瞬の油断が経営の根幹を揺るがす事態になる可能性があります。このようなとき、当社の経営理念が、判断に迷いが出たときに立ち返る軸となります。経営理念を大切にしながら仕事をしているか、経営理念に照らして物事を判断しているか、といった視点を持つことが、組織のパフォーマンスを高める方向へと導きます。経営理念を組織に浸透させることにより、社会課題の解決と収益力の向上を両立し、社会と会社の持続的成長を実現していきます。

■ 2022年、播磨新工場への期待

2022年12月に播磨新工場が稼働します。新工場はボイラの大型化、高温高圧化など、多様化するお客様のニーズに応え、高品質なもののづくりの方針を継承し、生産性と品質をさらに高めた、人・環境にやさしい生産拠点となります。播磨工場の80年にわたる歴史を引き継ぎ、伝統に新しい生産技術を融合させた、新たな時代にふさわしい新工場として期待しています。

当社は、2006年から国連「グローバル・コンパクト」*に参加しており、4分野(人権、労働、環境、腐敗防止)10原則を支持しています。これらの世界共通の理念を理解、尊重しながら、事業を展開していきます。また、当社グループは、再生可能エネルギーという言葉がまだ一般的に使われていない時代から、廃棄物、バイオマスを利用した高効率発電など、温室効果ガスの排出量削減技術で社会課題の解決に貢献しています。国連の「持続可能な開発目標(SDGs) **P14**」や、COP21の「パリ協定」への取り組みは、当社グループの事業と非常に親和性の高いものと考えています。

最後に、このCSR報告書は、当社グループの活動を幅広いステークホルダーの皆さまに知っていただくとともに、グループの一人ひとりがCSRについてよく考え、事業とCSRに取り組んでもらうために作成しました。当社グループの活動が、社会課題の解決、社会の持続的発展に貢献できるよう、皆さまからのご意見を真摯に受け止めていきますので、忌憚のないご意見、ご指導を賜りますようお願いいたします。

*国連「グローバル・コンパクト」:

タクマグループは、国連グローバル・コンパクト(UNGC)に参加しています。国連グローバル・コンパクトは、各企業・団体が責任ある創造的なリーダーシップを発揮することによって、社会の良き一員として行動し、持続可能な成長を実現するための世界的な枠組み作りに参加する自発的な取り組みです。



At a Glance

数字で見るTAKUMAの強み

●設立

1938年

●連結売上高

134,092百万円
(2022年3月期)

●連結従業員数

4,145人
(2022年3月31日現在)

●納入事例(累計)

一般廃棄物
処理プラント

360
(国内) 件以上

国内納入
No.1

ボイラプラント
(バイオマス)

630 基以上

全世界へ

産業廃棄物
処理プラント

120 件以上

全世界へ

ボイラ
(バイオマス含む)

3,200 基以上

全世界へ

上向流移床型
砂ろ過装置

2,700 台以上

国内納入
No.1

一般廃棄物処理プラント

地域社会のニーズに応える高度なごみ処理技術で循環型社会の実現をサポートします。

産業廃棄物処理プラント

高度な焼却技術で有害な物質も適正に処理し、産業界の環境保全活動を支援します。

水処理プラント

「水との対話」を通して、汚れた水の清浄化にトータルな視点で取り組んでいます。

汎用ボイラ

当社の燃焼技術の結晶として、広く産業界に支持を得ている信頼のブランドです。

空調設備・クリーンシステム

半導体産業をはじめ、大学・研究所・病院など多くの場所に快適でクリーンな環境を提供しています。

エネルギープラント

バイオマス燃料ボイラをはじめとする各種ボイラからトータルシステムまで、当社のコア技術がここにあります。

●CO₂排出量削減への貢献

当社の製品で
2021年度

約400万トン削減

●一般廃棄物処理プラントのシェア(累計)

規模・数
ともに国内

No.1

施設数

12.0%

施設規模

19.2%

P47

技術

廃棄物の処理から
エネルギーの創出まで

廃棄物を 処理する



熱や電気を つくる



地域に電力を 供給する



汚れた水を 再生する



世の中の基盤を担う TAKUMAのテクノロジー

タクマは、国産初のボイラの発明以来、
社会基盤や生産設備を支え、社会の発展に貢献し続けてきました。
人々の生活や産業の根幹にかかわる事業であるからこそ、
技術の追求は、当社の社会的使命そのものです。
これからも、創業より培った独自の燃焼技術、ごみ処理技術、
水処理技術などを生かしたプラントを通じ、気候変動をはじめとする
さまざまな社会問題の解決に向け技術の力で貢献していきます。



貢献

環境分野の
リーディングカンパニーとして



積み上げてきた実績と信頼 その誇りを、輝く未来へ

80年を超える歩み中で積み上げてきた実績と信頼は、当社が世の中から常に必要とされてきた証であり、お客様や社会が抱える課題の解決に対し、時代を問わず貢献してきたことに誇りを持っています。その現在地に決して満足することなく、変化する時代の中、社員一人ひとりが力を合わせて社会の持続可能な発展に向けて挑戦を続けていきます。

タクマが地球にできること。
「環境保全」と「再生可能エネルギーの活用」。

国連で採択された「持続可能な開発目標(SDGs)」でも掲げられた、地球環境にとって重要なこれらの課題の解決に向けて、当社はさまざまな技術を駆使して実現しています。世界の人々が豊かな暮らしを営めるように。地球の豊かな環境を守り続けるために。私たちのチャレンジは続きます。



軌跡

すべては一人の男の
挑戦から始まった

1938

田熊汽罐製造の 創業

創業者の田熊常吉は、1912年に日本初の純国産水管式ボイラを発明。この「タクマ式汽罐」は当時から外国品を上回る性能を発揮し、名を広げていきます。1938年には「田熊汽罐製造株式会社」設立。社は「汽罐報国」を制定し、ボイラ（＝汽罐）の製造を通じて、社会や環境に貢献（＝報国）するという理念は、今も経営理念の礎となっています。

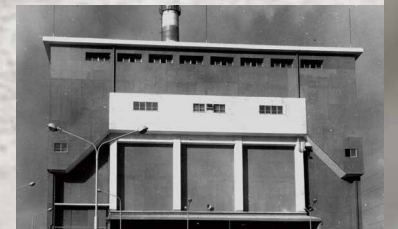


田熊常吉

1958

環境衛生市場へ 進出

プラントから排出される熱を利用した廃熱回収ボイラの開発、近代的なごみ焼却技術の開発、水処理市場へ進出するなど、ボイラメーカーだけでなく、環境衛生装置メーカーとしての地位を確立しました。1963年には、日本初の連続式ごみ焼却プラント納入に至りました。



日本初の連続式ごみ焼却プラント(1963年)

1972

産業社会の 発展とともに

高度成長にともなう、産業界における省エネ需要、都市ごみの増加と多様化への対応、水処理設備による水質の改善など、さまざまな要望に応える技術開発に取り組み発展しました。1972年、中心事業である「汽罐」の製造に留まらなくなった田熊汽罐製造は、現在の「株式会社タクマ」に社名を変更。環境機器など多角的な事業を展開する企業体へ転換します。



社名変更
(1972年)

世界初の真空式温水発生機
「バコティンヒーター」量産化
(1975年)

1985

強靱な経営基盤の 構築へ

自ら変革を続け、激動の経済環境へ対応するため、1985年に当社最初の中期経営計画を策定。1992年には「汽罐報国」の想いを受け継いだ新社は「技術を大切に 人を大切に 地球を大切に」を制定。これまでの実績と信頼が結実し1998年には現在も稼働する、国内最大規模のごみ焼却プラントを納入するに至りました。



尼崎本社ビル竣工
(1995年)

東京都新江東清掃工場
納入(1998年)

2001

新時代を築く 世界への挑戦

再生可能エネルギーと環境保全分野での飛躍をめざし、さまざまな廃棄物やバイオマスのエネルギー利用と無害化技術を提供。海外の現地法人設立を進め、日本のみならずアジアを中心に世界に向けてタクマの技術を展開しています。



欧州で廃棄物
発電プラント納入
(2010年)

タクマ太陽光発電所
(2013年)

2022

持続可能な 未来の実現へ

現代社会は目まぐるしく変化を続け、気候変動や人口構造の変化など複雑な課題に直面しています。当社は2021年度にESG経営の推進を掲げる長期ビジョン「Vision 2030」および第13次中期経営計画を策定し、現在その目標に向かって一丸となって取り組んでいます。今後も企業価値の向上と、持続可能な社会の実現へ、歩みを進めていきます。



播磨新工場イメージ写真 完成予定2022年12月

未来へ受け継ぐ 「汽罐報国」の想い

タクマの創業精神である「汽罐報国」。ボイラ（汽罐）の製造を通じて社会や環境に貢献（報国）するというその理念は、創業者・田熊常吉の想いであり、時を超えて今に至るまで社員に受け継がれています。

創業当時の
社章



創業の際に定めた社章には、社業の支柱である「研究」「製作」「据付（設置工事）」を三位一体として三角形にかたどり、図案化した社名（タクマ）をあしらっています。常に質の向上を第一に、お客様や社会に貢献しようとする当社の理念を表しています。



TAKUMA'S WORK

多様性をイノベーションの力に。

タクマのESG経営を推進するためには、
従業員一人ひとりの多様な個性や能力のシナジーが不可欠です。
互いに切磋琢磨し、挑戦する風土が息づく当社では、“人”のもつ可能性を最大限に発揮し、
力を合わせて社会やお客様に新しい価値を創造していきます。